畫圖西遊譚

肆

西遊旅譚巻之四

十一月十四日長崎を發して三里時津に至る十五日朝船より乗風雨波荒くして大村領亀浦といふ小島に泊る程なく船を出して又小串といへる小島にかゝる大串島有船より出海岸を出す皆岩石雲母なり此秋大風雨にて爰に泊を十六日巳の刻此船を出して六里を走平戸領針尾瀬戸に至る右ハ大村領左ハ平戸領なり地の辨天沖の辨天なり此所半里程の中山入組齟齬として潮岸岩に觸波うちして皆雲珠捲をなして誤て乗入バ船忽沈むと又海底岩石抜出る

所ハ白波飛(トン)で沸湯(ホツタウ)のぬし潮満(ウシホミチ)を知と云干潮(ヒシホ)ハ不乗(ノラズ)




向所ハ長崎の方なり
沖ノ弁天

平戸城下
勝青山ヨリ
眺タル圖





カクハラ
小川シマ
岬コ
ミサキ
ク嶋



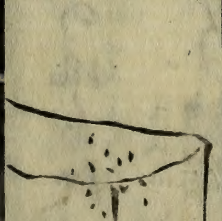
則針尾(ハリヲ)の瀬戸を越て小鯛が浦と云小島に寄るに船をかける又ほどなく大鯛が浦に船を留(トム)て此日秋丑の刻より東風に帆をあげ九十九島の内牛(ウシ)が首(クビ)をまハり島々を見て走(ハシ)る事十七日四時(ヨツトキ)ばかり平戸島に着(チヤク)岸(ガン)す此平戸(ヒラド)城下廻船(クワイセン)数(ス)十艘かゝれり鮪(シビ)鱒(マグロ) 西国(サイコク)にてハシビと云 大坂にてハハツといふ

[江戸より 八ツ口より]を積(ツミテ)たる船おりしに發(ハツ)して冬月時雨(シグレ)の風多く帆と
よりて玄界(ゲンカイ)灘(ナダ)をこえ下の関にいたり夫より防州(スハウ)灘(ナダ)
をこへて阿波(アハ)の鳴門(ナルト)[ナリ]瀬戸をいたり志戸(シト)の国鳥羽(トバ)ノ
浦より伊豆の東海を経(ヘ)て七八日にして江戸に来る也
[小田原町より壹人出ス]又船中滞(トドコフル)事なれば塩(シホ)に漬(ツケ)るに鰹(カツヲ)に無し塩あり
[鮪ハ伊豆より秋冬漁するもの也三四尺のものなり 平戸より五六尺勢那鯨ほどのもの丈余甚毒なり]此島煖土(ダンド)まして橙(ダイダイ)ザボン
[ダイにし 十倍ナリ]多し雪霜(ユキシモ)稀(マレ)なり赤大根(アカダイコン)赤蕪(アカカブラ)なり菜茶など多し
土瓶(ドビン)にて佳茗(ヨキチヤ)をせんじ菜のしけ蕪漬(カブラヅケ)なり冬月に
いてども食事(ショクジ)四度(ヨタビ)にす

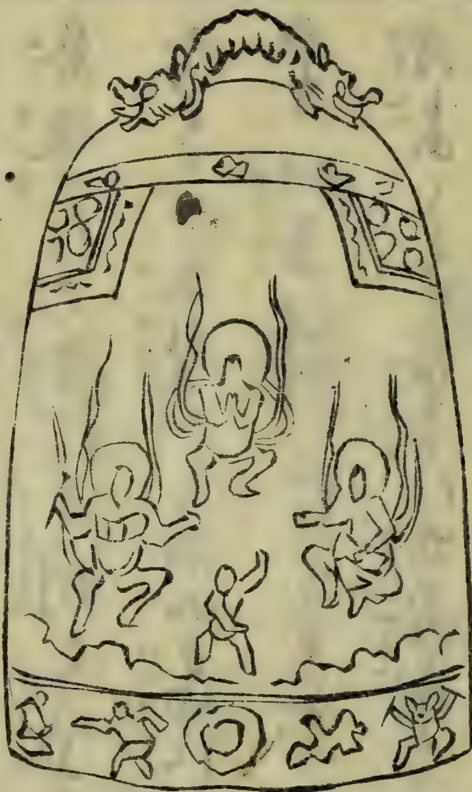
平戸城下觀音院の地内鐘ハ支那より渡るといへる
眞ハ支那物にて播州尾上の鐘と同物なりといふ
説者堂ハ小松重盛の説者といふ又阿部宗任が塚あり
昔ハ和蘭及イギリスより此島に船を着しける
園の屏今にあり石を重ねチヤンを塗ると市街の
橋石を以て作る事長崎のごとし昔西洋の人十一月廿三日冬至作る今にあり
又これ寺ハの開基支那僧なる故今に此国を祠るの習
俗家にも及び餅等搗祝ふ

説者院地内鐘之圖

阿蘭陀墻



聖護院御願所平戸島觀音院
奉施入鐘一口應永十二年未
十二月日と彫てあり

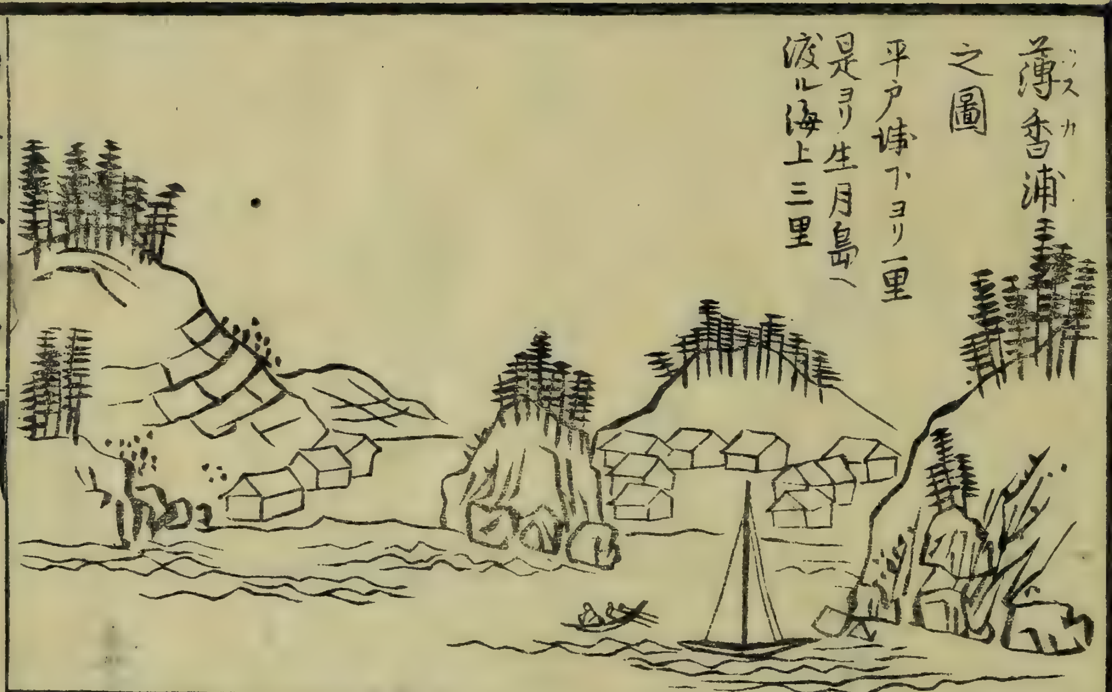


天人樂器を鑄たり



平戸城下より一里北の方白嶽といふ行路坂をのぼり山に入柴生して樹なし馬乃牧を放白嶽絶頂より大島宅島眼下に見え遥に壱州見ゆる又東に對馬を間し小崎二つ並ぶ布太髪といふ西の遥に朝鮮国岸まで見ゆるなり東の方斑島（唐津乃絶地也）西の方日本の地つくし支那海なり西より南壱岐月島ありて西南にあたり八重山嶽ありて平戸第一の高山なり夫より嶽をくだり田助浦といふ出崎より下関の方へ渡るに船をかける港なり

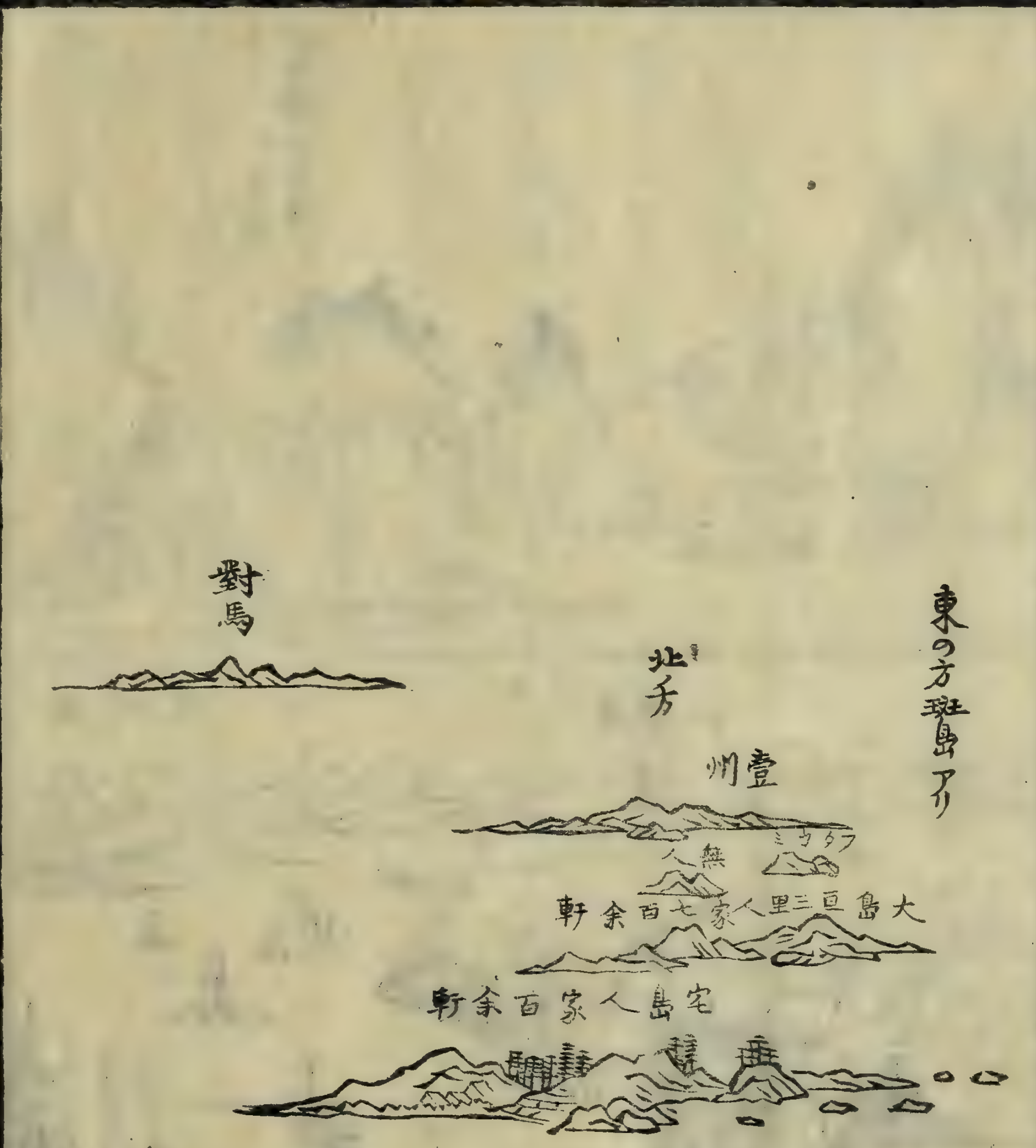
方濟日本房州に漂流せし時長崎まで送らるる程通を一軸の図を著す巻中に平戸田助の港に泊して船中より望の図あり余模写して携へ帰る余が図あるところ山より眺むる景色にして図中にえがく所は鮪樓なり

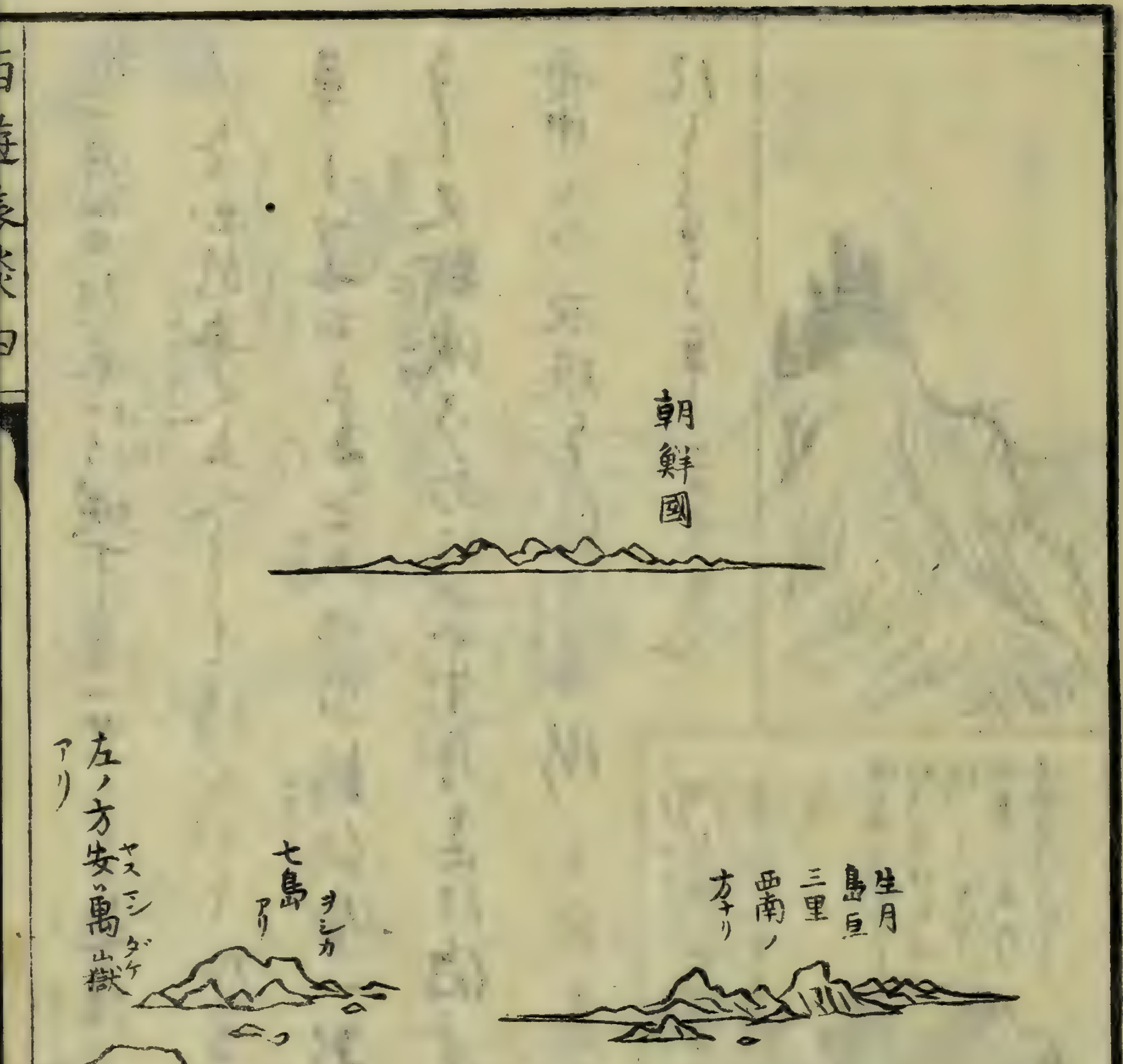


薄香浦之圖
平戸埼下ヨリ一里
是ヨリ生月島ヘ渡ル海上三里



田助浦
唐津山


對馬
北方
東の方斑島アリ
壹州
無人
大島亘三里人家七百余軒
宅島人家百余軒
横島
白嶽頂


朝鮮國
生月島亘三里西南ノ方ナリ
七島アリ
ヨシカ
左ノ方安ノ島山嶽アリ
ダケ

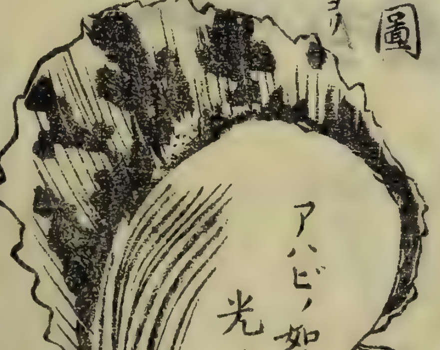
十二月四日朝風になり城下より一里山を越薄香浦に至り此浦より
舟を出す舟人五人ましまし櫓をおして風をまて浪高し船に頭
草といふ所あるを入此所鮪納屋一軒あり其余人家
なし又鮪漁の船にて生月嶋に渡る海上三里濤大にして
舟中に入衣服を絞日暮頃生月嶋に着岸このしま
にとゞまる事三十日也

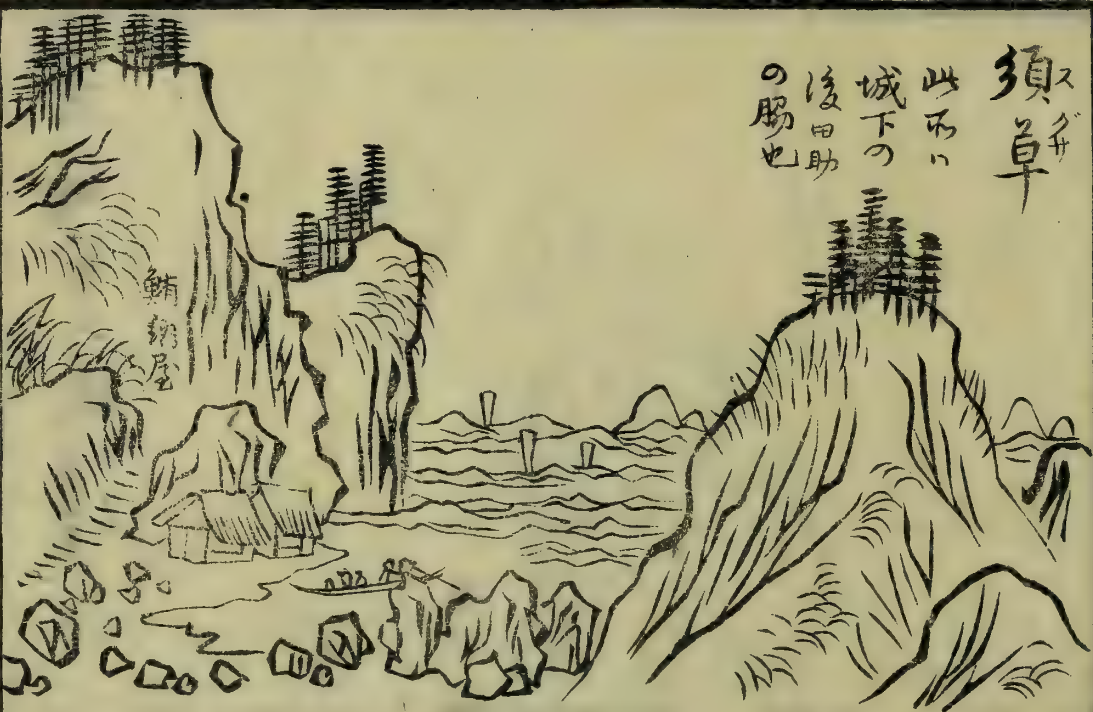


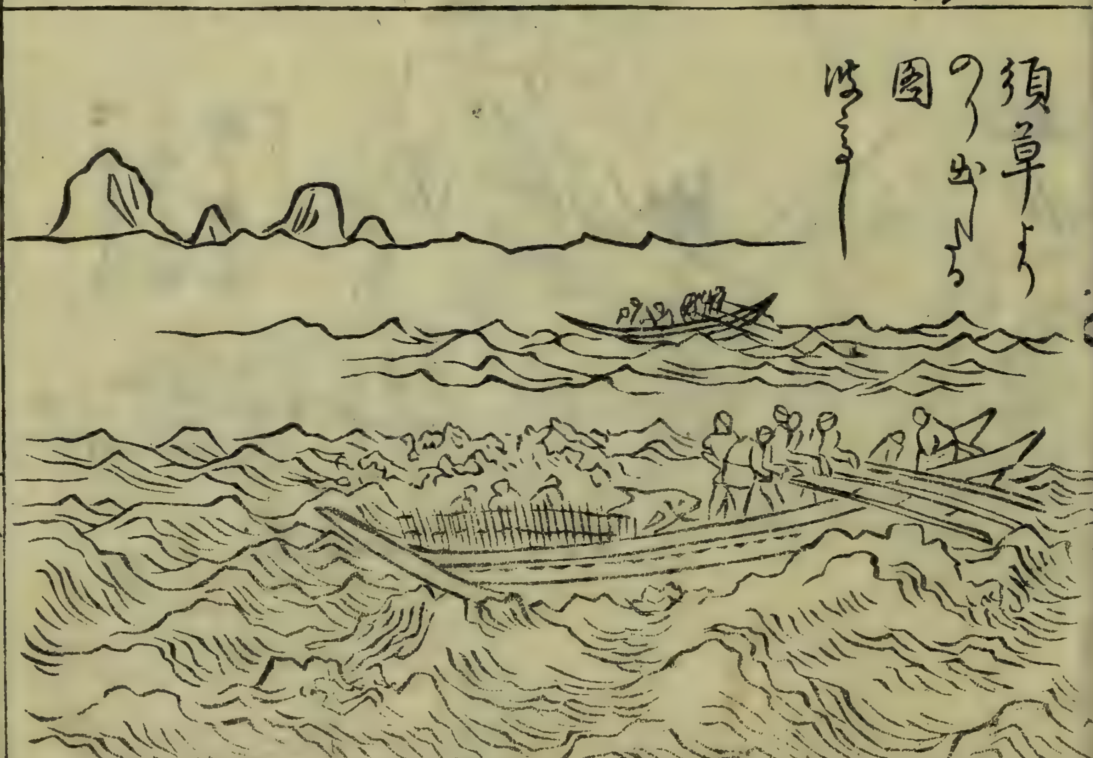
阿子貝之圖

真珠ハ此貝ヨリ出ル

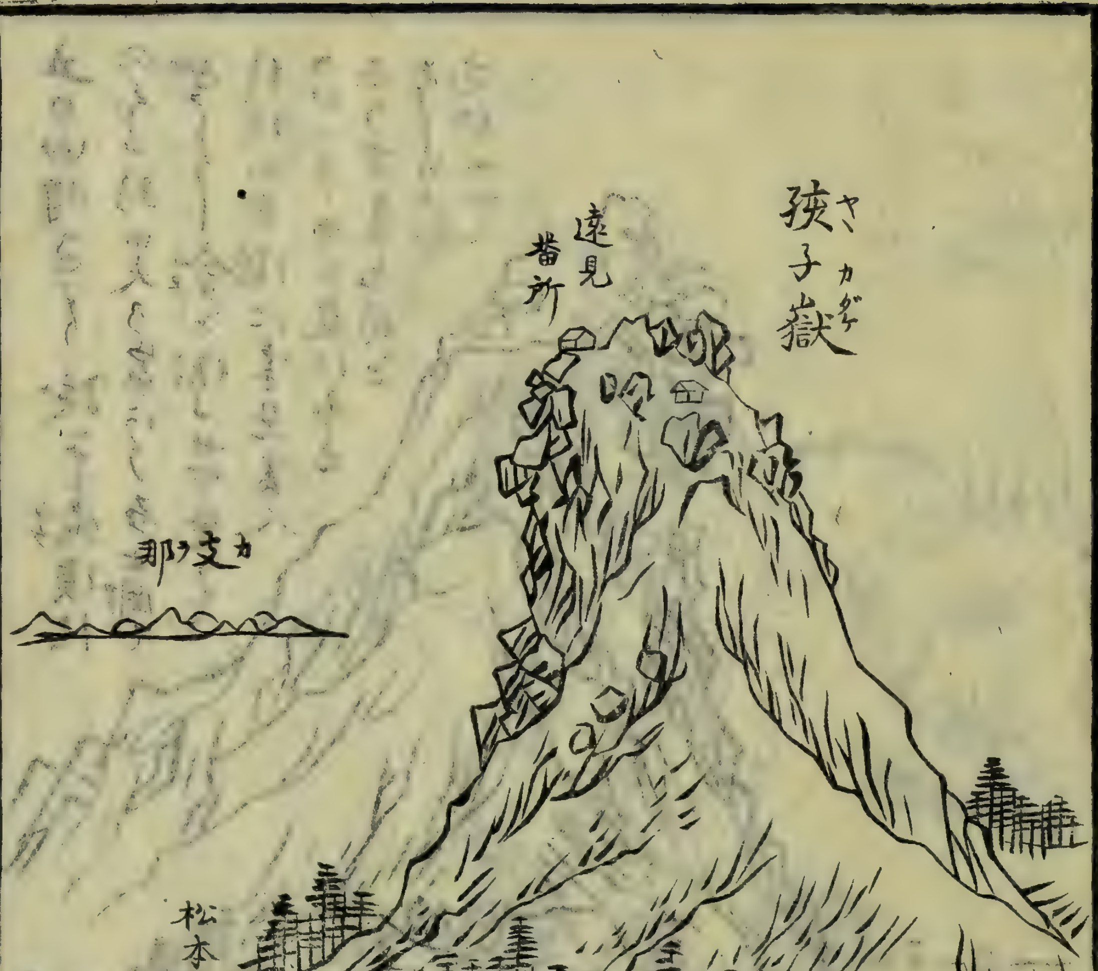
此邊の海中にあり又伊勢の海よりも出る二見か浦の名産なり



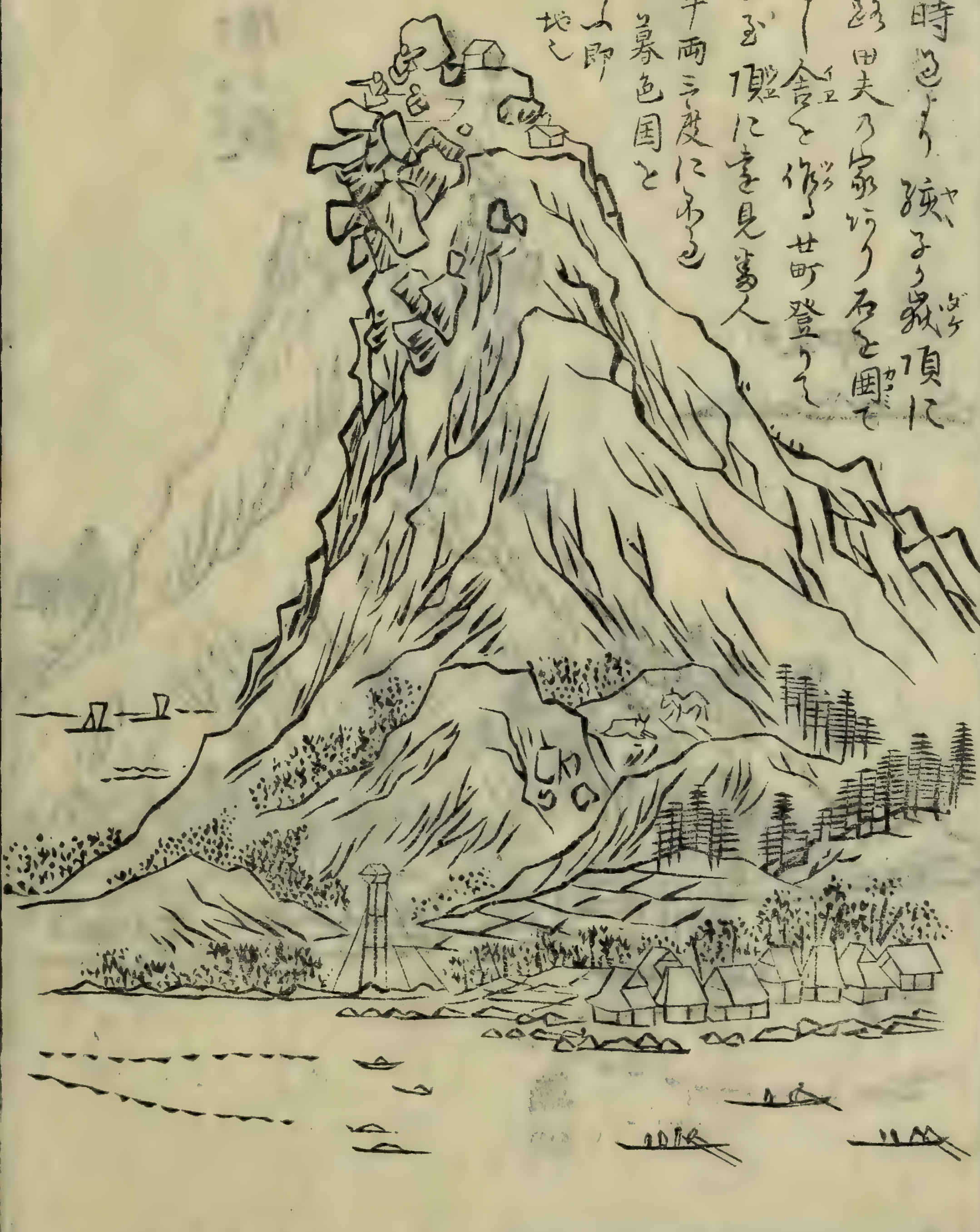

須草(スグサ)
此所ハ城下の後田助の脇也
鮪網屋


須草よりのり出したる図


生月島之圖
亘三里アリ
琵琶嶽
此所ヨリ後三﨑ト云所鯨ヲ解ク所アリ
益富宅


狭子嶽（サカガケ）
遠見番所
那ノ支カ
松本ノ方
鮪見楼
鮪網

五日四時過より弥子が嶽頂に
のぼる路田夫の家ありて石を囲て
壁とし舎を作る廿町登りて
絶頂に至る巓に達見る人
の曰一年両三度にある
西の方暮色国と
見ゆるよし即
支那の地也



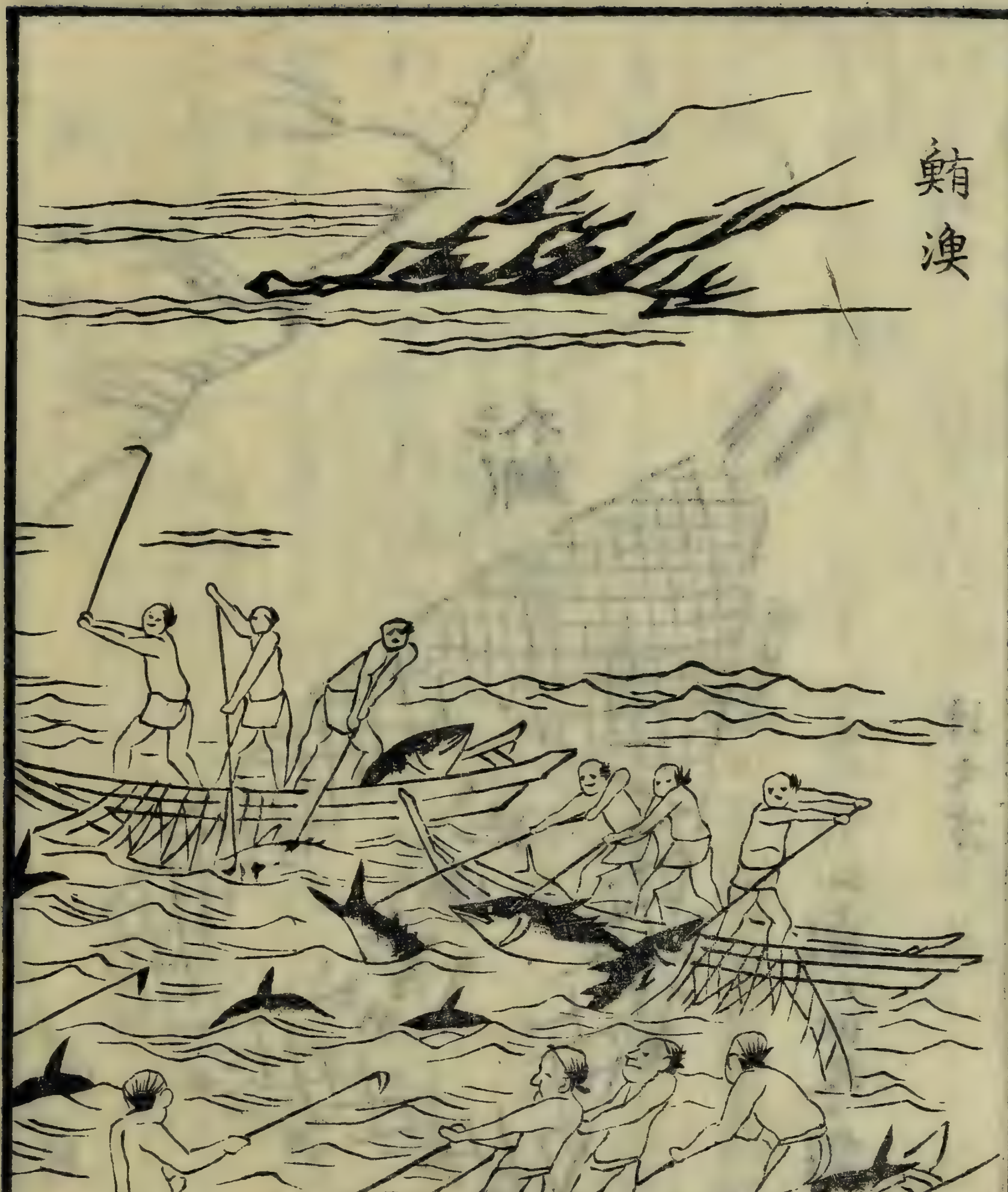
狭(ヤ)、子ガ嶽(ガダケ)ニ登(ノボル)山中小童(コドモ)来ル図(ヅ)ノ如シ

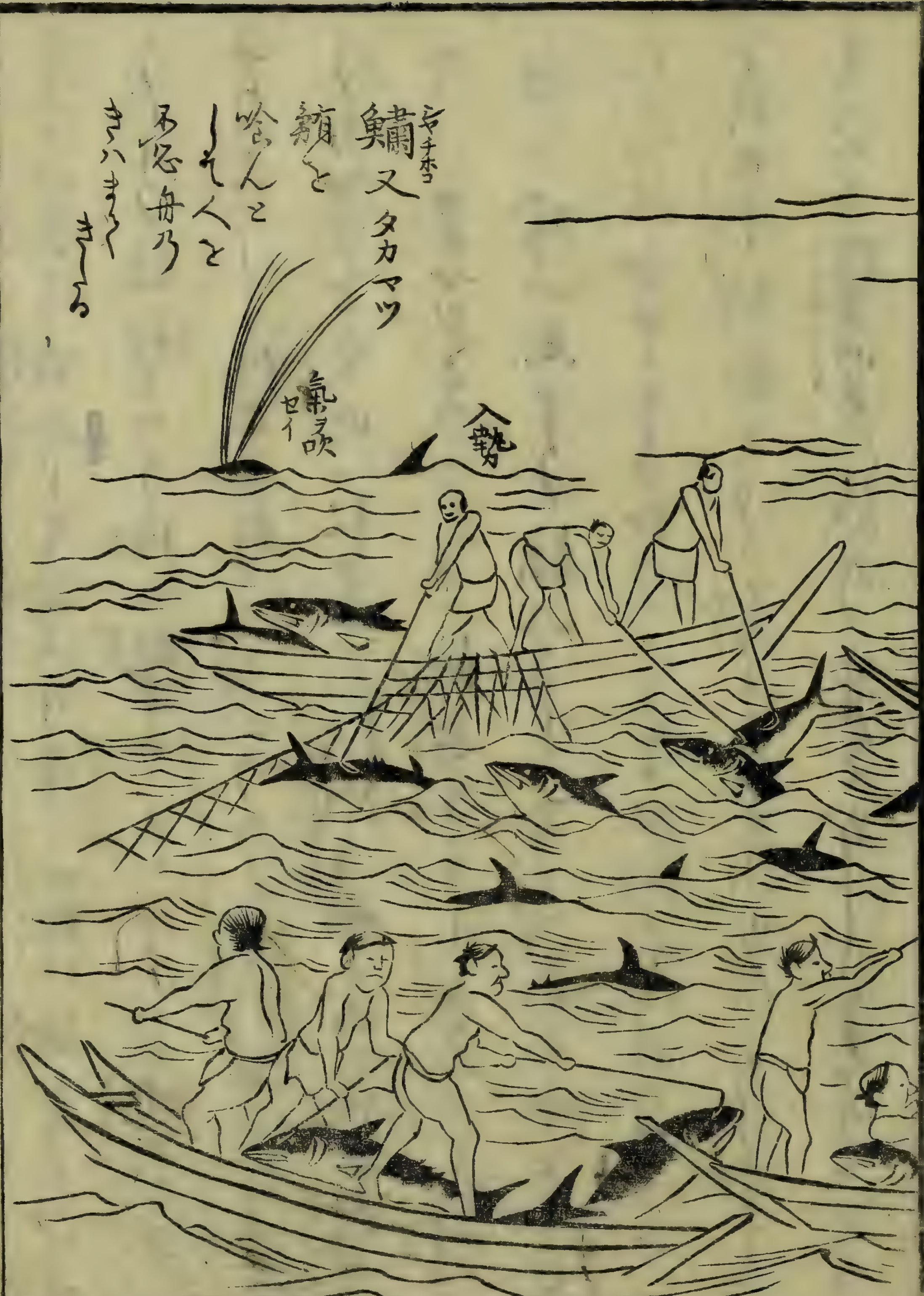


此邊海中より龍の天に昇事あり龍昇んとするときハ海波
渦の如く捲上り天よりハ黒雲降其雲波とまじハる也
ど波高くなり次第ニ天上するとき鱝といへる魚の尾乃如き
ものあり雲の中よりさがる即ち鱝の尾なり故に此島の者ハ
龍の昇るを見て鱝の尾と云 漁父がのがるゝ事八日此島乃うち
杉本といへる所鮪漁をなす鮪ハ冬月山の
岸をはなれざる故に山の腰に網を布一網に
二三百或四五百大漁乃時ハ千も入よし

鮪網之圖


地ノ方
本網
百廿尋
沖之方
起網
是ハ網底ヨリ
百八十尋
一尋ハ四尺ニ當ル
百六十尋
立櫓


鮪漁


鱅又タカマツ
シャチホコ
鰖々と
唸んと
しそ人を
不忍舟乃
き々ハまく
きしる
氣ヲ吹
セイ
入勢

十三日此島(シマ)も煤(スヽ)払(ハラヒ)して祝ふ事同し四時(ヨツトキ)比鯨(クジラ)来るといふ見れバ鯨船ハ櫓(ロ)八艇(テウ)立て矢のことくかくる也風もやハらかにして波のうねりハ太山(タイサン)乃ごとし羽刺(ハザシ)舟のおもてに立ち四方を乗(ノリ)廻(メグル)るにタカヘツ一名鯱(シヤチ)潮(ウシホ)を吹き山に映(エイ)し煙(ケフリ)乃ごとしタカヘツ来るときハ鯨(クジラ)逃(ニゲ)去(サル)よしタカヘツハ則鯨を喰ふ魚なり鯨いよしこれ故に舟を生息(イキツキ)にさせ舟中より西の方を望ば山々唐画のごとし

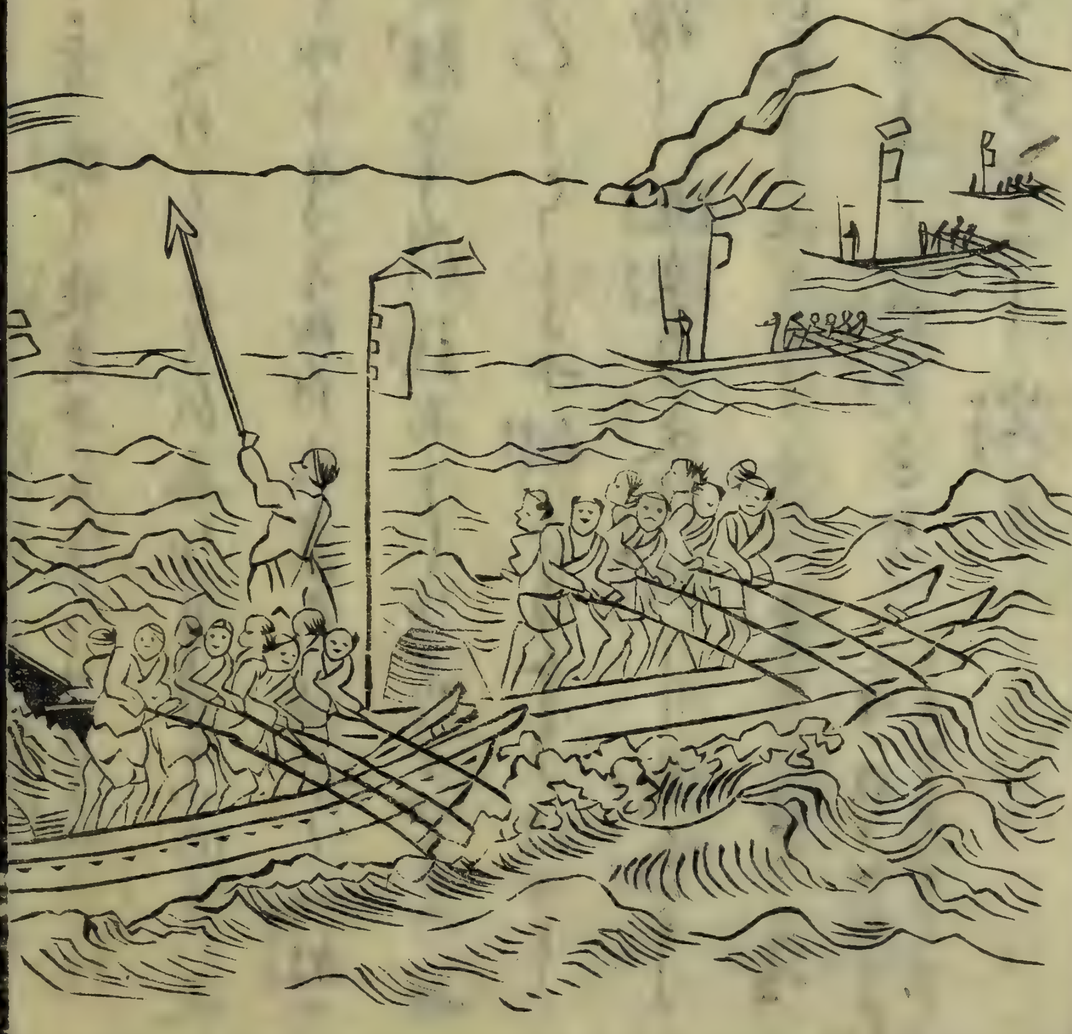
十六日早朝(サウテウ)鯨見ゆる直(タヾチ)に舟を漕出ば走る事矢乃如し彼方(カナタ)此方(コナタ)に鯨乃脊(セ)を出し気(キ)を吹をみる

夫より舟ハ鯨(クジラ)の見(ミエ)る方へ追(オウ)て走(ハシル)尤平戸島(ヒラトシマ)と生月島(イキツキシマ)乃嵜
の海ちかく鯨いけどらんとひしめきあへば舟を生月島の方へ追
らんとする時いかゞする大島の沖より一艘(イツソウ)の
船より鯨とらへ魚(モリ)鯨とらへし旗(ハタ)あげしとなへし四方の舟
鯨の方におもむかんとする十艘(サウ)ばかりなり漕ぬり
鯨をはさめむる漁り巨魚(オホウヲ)乃大洋海(タイヨウカイ)より飛動(ヒドウ)する
とするに波濤(ハトウ)山のごとしやがて余(ヨ)の乗(ノリ)し舟をとゞめ
より不(?)つぐる日後(ツケ)て初更(ショカウ)になり
岩石(カンセキ)を揺(フル)ふ波の音を聞しに此所に宿(シユク)して

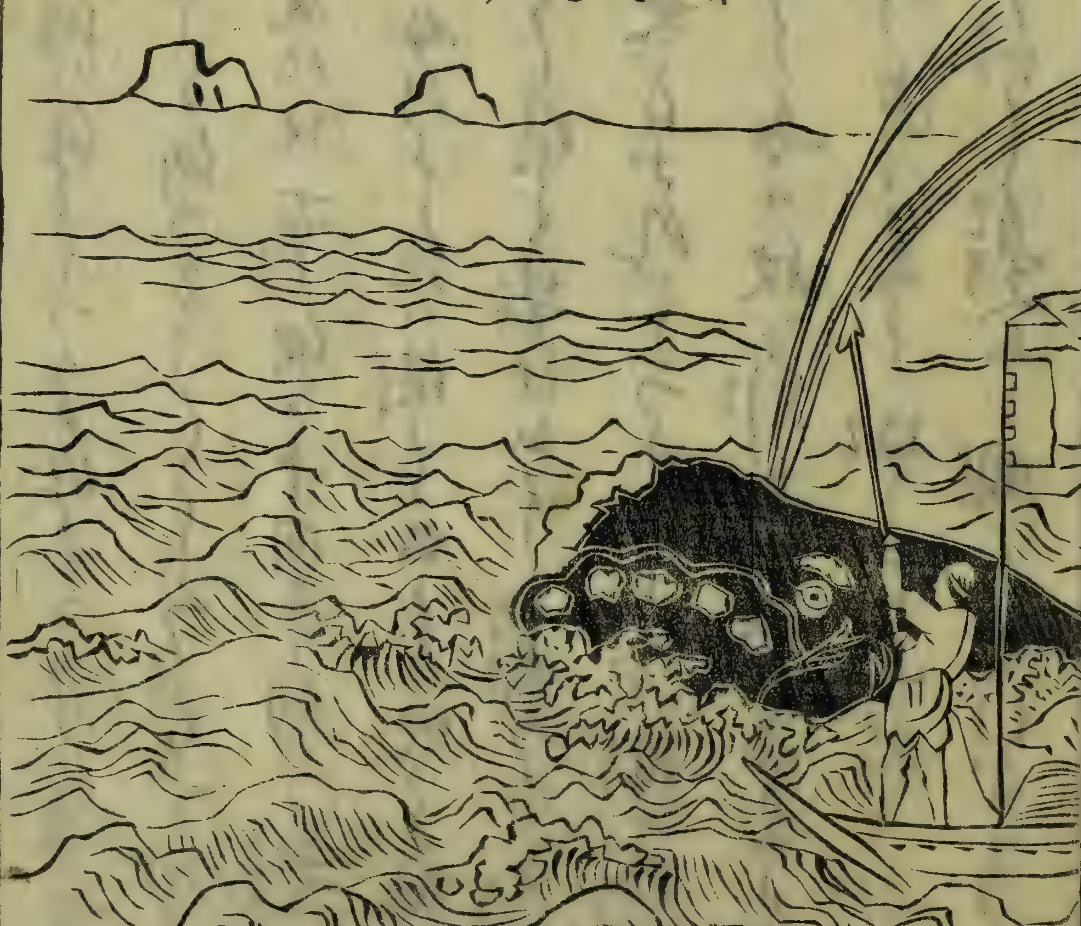
三崎ハ鯨を切解所にて居宅より一里ばかりの方なし

鯨漁之図

鯨頭を出し海より
あらわれ潮を吹別
丈とふくらし魚銛を
投る気くを吹終れハ尾
を出し浪を打て海
底に入



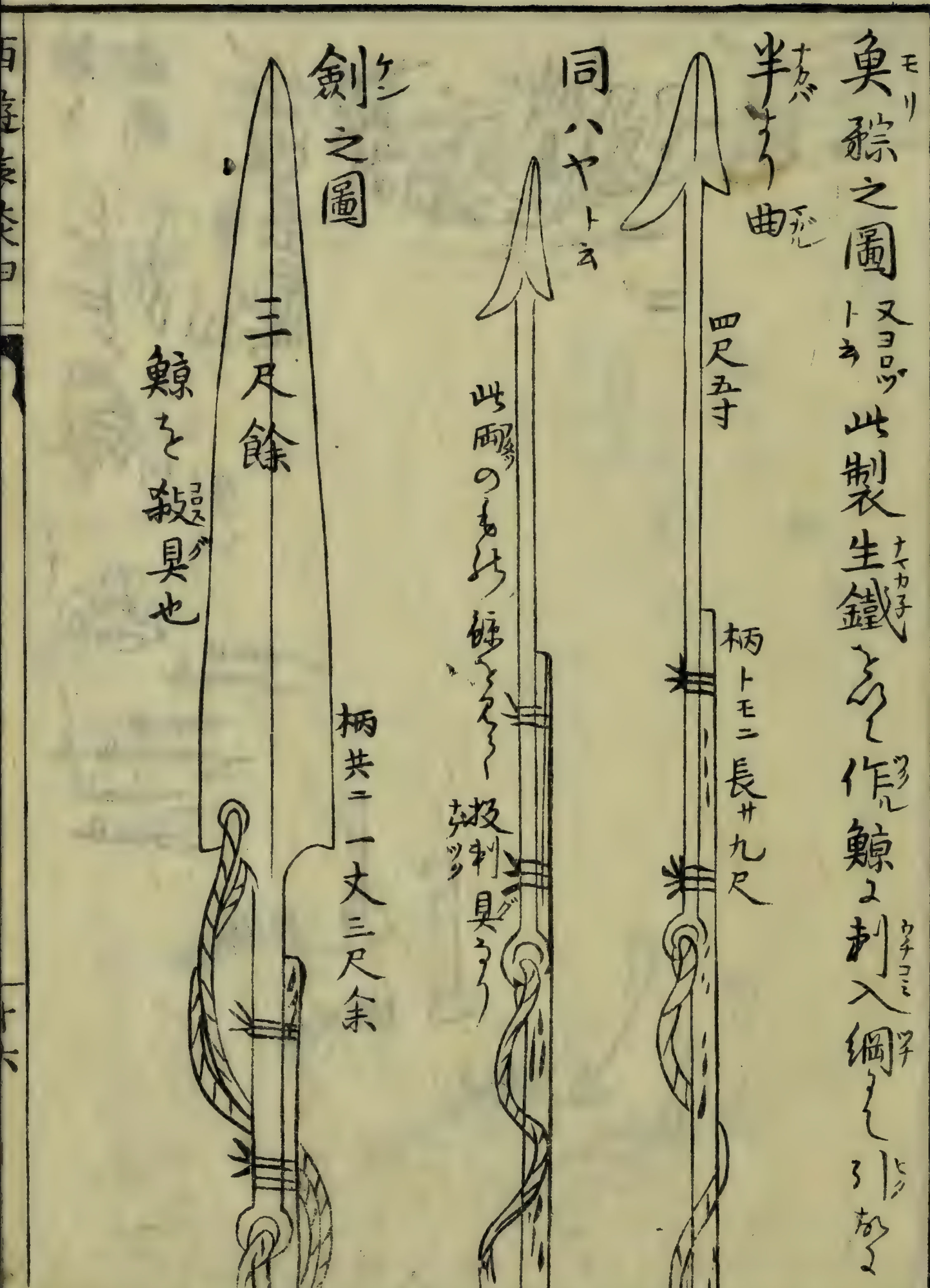
鯨舟ハ二十艘を出す
これを勢子（セコ）舟といふ又
網舟を出し雙海と
名づく
一結（ヒトムスビ）といふハ網舟二艘に
通（カヨヒ）舟二艘なり此ごとくし
三結を出し二結ハ皆を
六艘網舟ハ大船なり
是網を積故なり



鯨を網にて捕ことハ網ハ縄にてつくる浮木をつけて幕のごとし海中に張おきて其張たる網の方へしだいにくじらをおふ網ハ七八百間も海底に張なり網と十間二十間づゝ繋ぎくじら其の網に懸れバ其網ハ繋たる所より切れて鯨乃頭に冠りて鯨ゆかれども悩む故に舟近寄して矢銛ハ鯨の脊に舟を乗かけざれバうつ事あたはず銛一鉾投其紀銛に縄を付て舟一艘にて引又一艘の舟来て銛をうちけれバ二艘にて引後より来て投ときハ舟数をまし次第に鯨よはるを見て四艘し身より舟を囲て鯨の引方に取り又

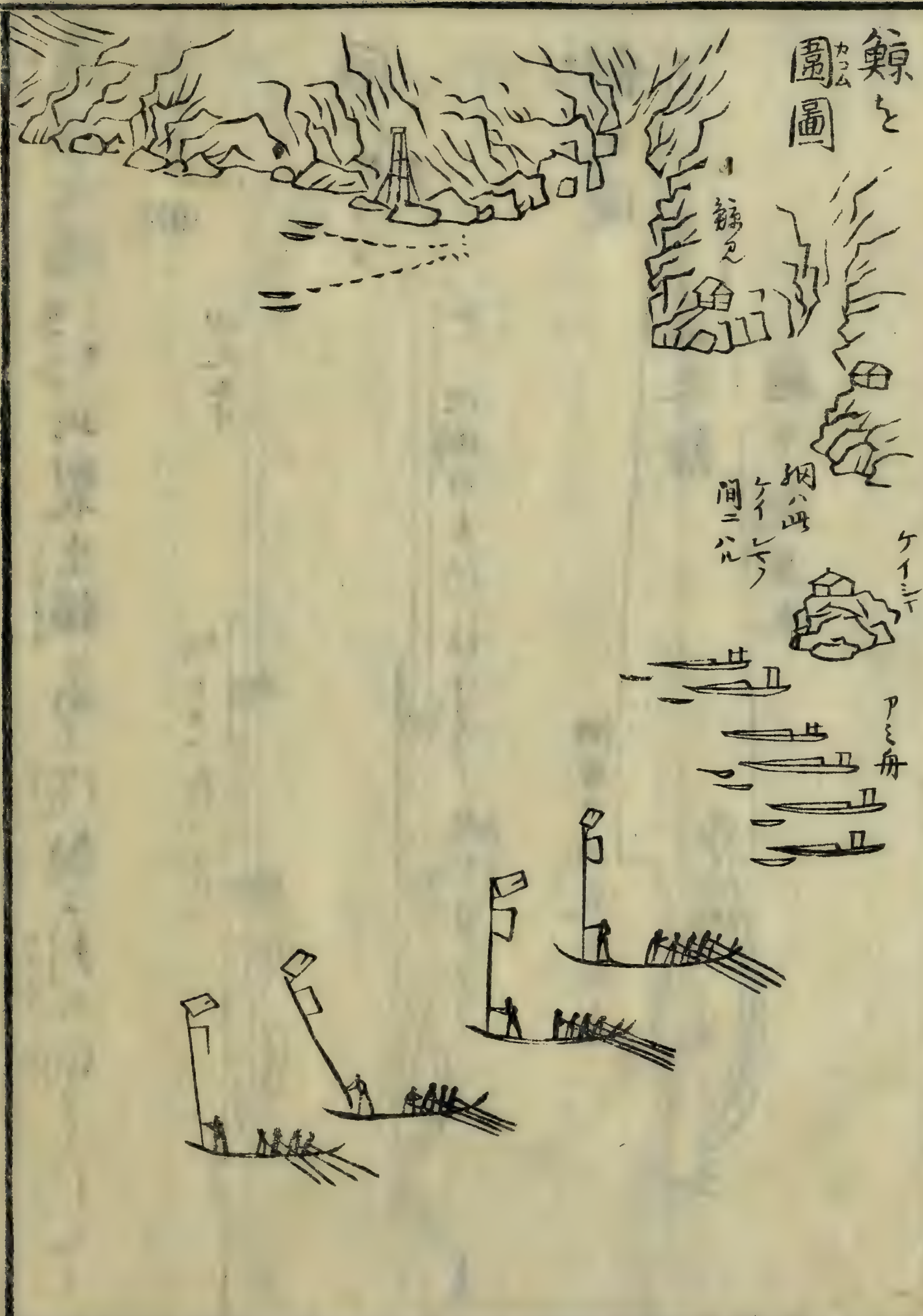
頭より出し潮をふきける劔（鯨を殺す具なり）を打事数くなればおびたゞしく
鯨潮を吹事ならずして出るとのゝ吹出しける時一人の若者海中よ
り飛入鯨の脊にのぼりその脊を穿大綱を曳透しける鯨ハ又
波を打て海底へやゝしばし入けるに又々もとのごとく脊よ
り騎ありしく又一人の者ハ大綱を持て波の底へ鯨の腹の下を
旋出それより舟二艘に梁を渡し置鯨を繋とめ舟より
引舟にして汀の方に近く是を鯨更いまだ死せずして
共倶に鰭をうごかして潜まんとする沖へ死ざれハ沈没て汀
よりあまたの者船より刺をかざしてかゝりしに劔を刺串

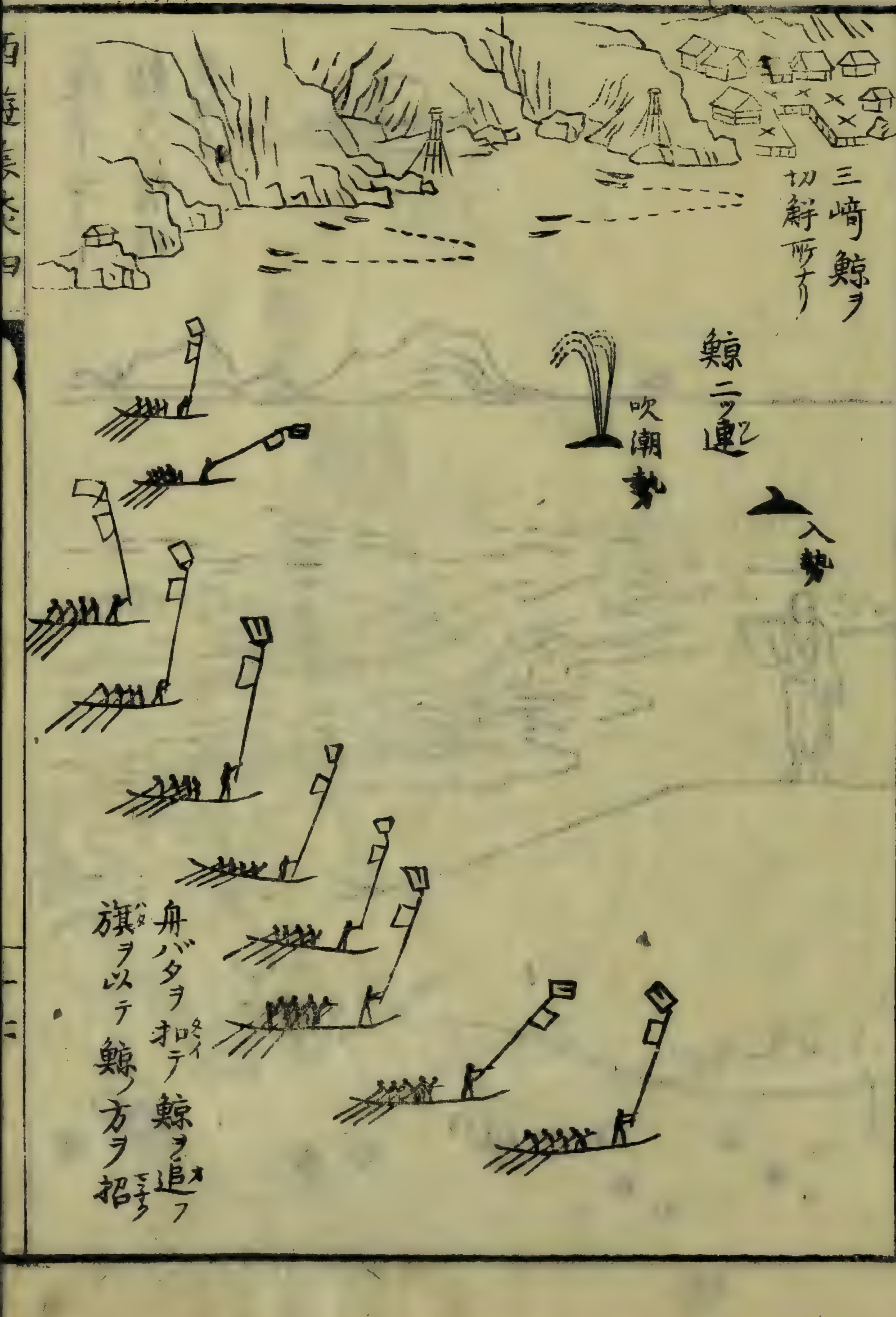
と止む余江漢此地に過て鯨鯢の趣を見ん刺に（勢子大将なる）水主者の働遠き戦国の人のごとし終に鯨の血流れ出て朱の色をなせり別大島の沖（平戸の領島なり 鯨の漁場也）向海原ハ壱岐の国対馬遥に朝鮮の大海より鯨ハ漾初更より来る（夜明方朝鮮へ帰る）潮に鯨の半を隠せり全体ハ見えず（夜ハ朝鮮へ帰ると也）要害出て見たれば潮干て全体を満月の光りさし見る大サ十間余の世美鯨也（世美ハ上品也）鯨剥又ハ助回りの時刻にして切れしとぞ此島にて両三度見るに終に全体を見ざるは稀なり

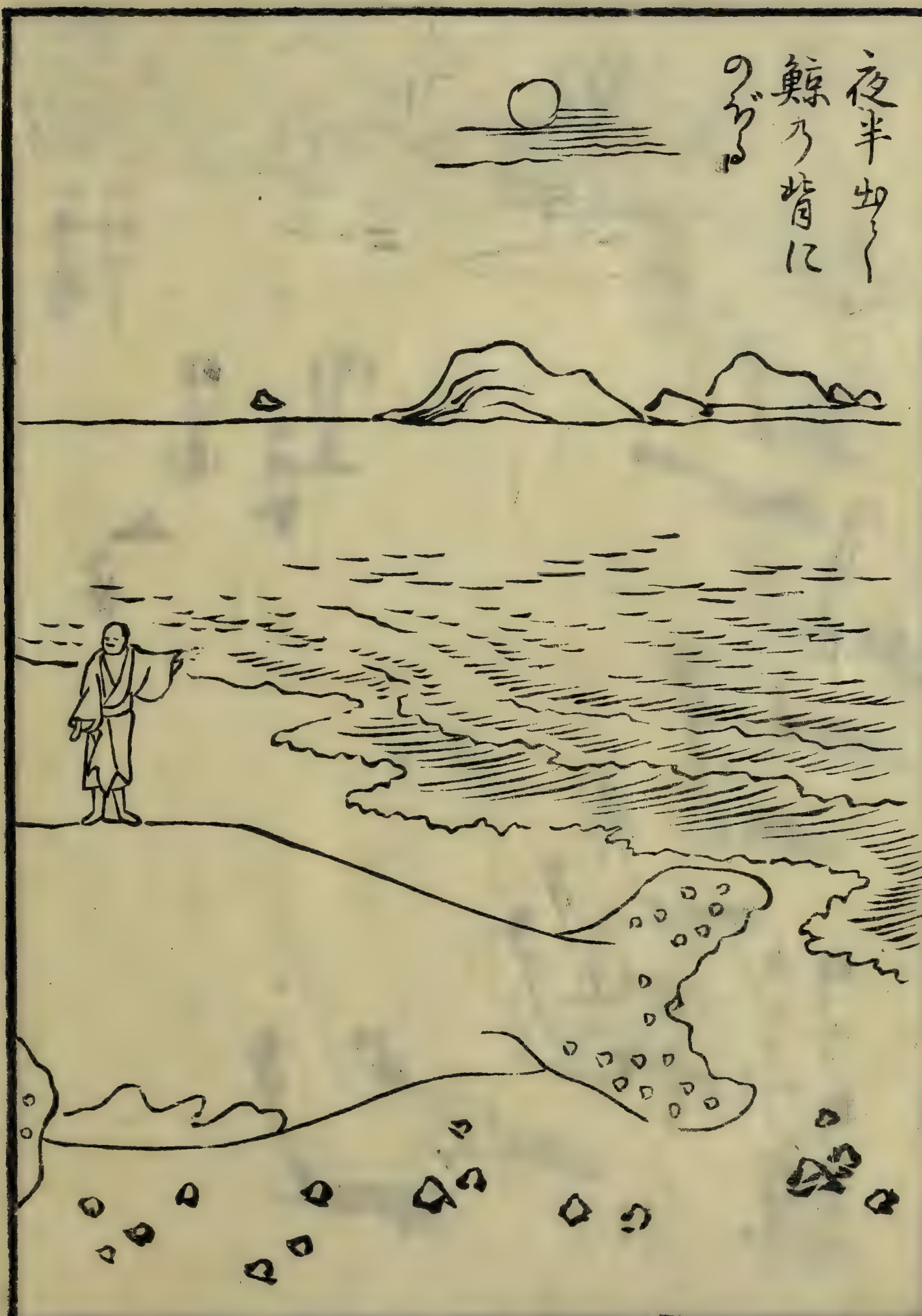


臭鯨之圖 又ヨロヅトモ云
此製生鐵(ナマカネ)にて作ル 鯨に刺入(ウチコミ)綱(ツナ)をして引(ヒク)なる
半(ナカバ)より曲(マガル)
四尺五寸
柄トモニ長サ九尺
同ハヤトモ云
此銛(モリ)のさきハ鯨にさゝる 抜刺(ヌツク)具(グ)なり
剣(ケン)之圖
三尺餘
柄共ニ一丈三尺余
鯨を殺(コロス)具(グ)也

鯨を圍圖




三崎鯨ヲ
切解所ナリ
鯨二ツ連
吹潮勢
入勢
舟バタヲ扣テ鯨ヲ追フ
旗ヲ以テ鯨ノ方ヲ招


夜半出し
鯨乃背に
のぼる


鯨番人

鯨切解圖

此所ヲ三崎ト云

鯨大腸(チャウ)を剪(キル)とき鑞(イシ)

又此胴の奥にて見ん

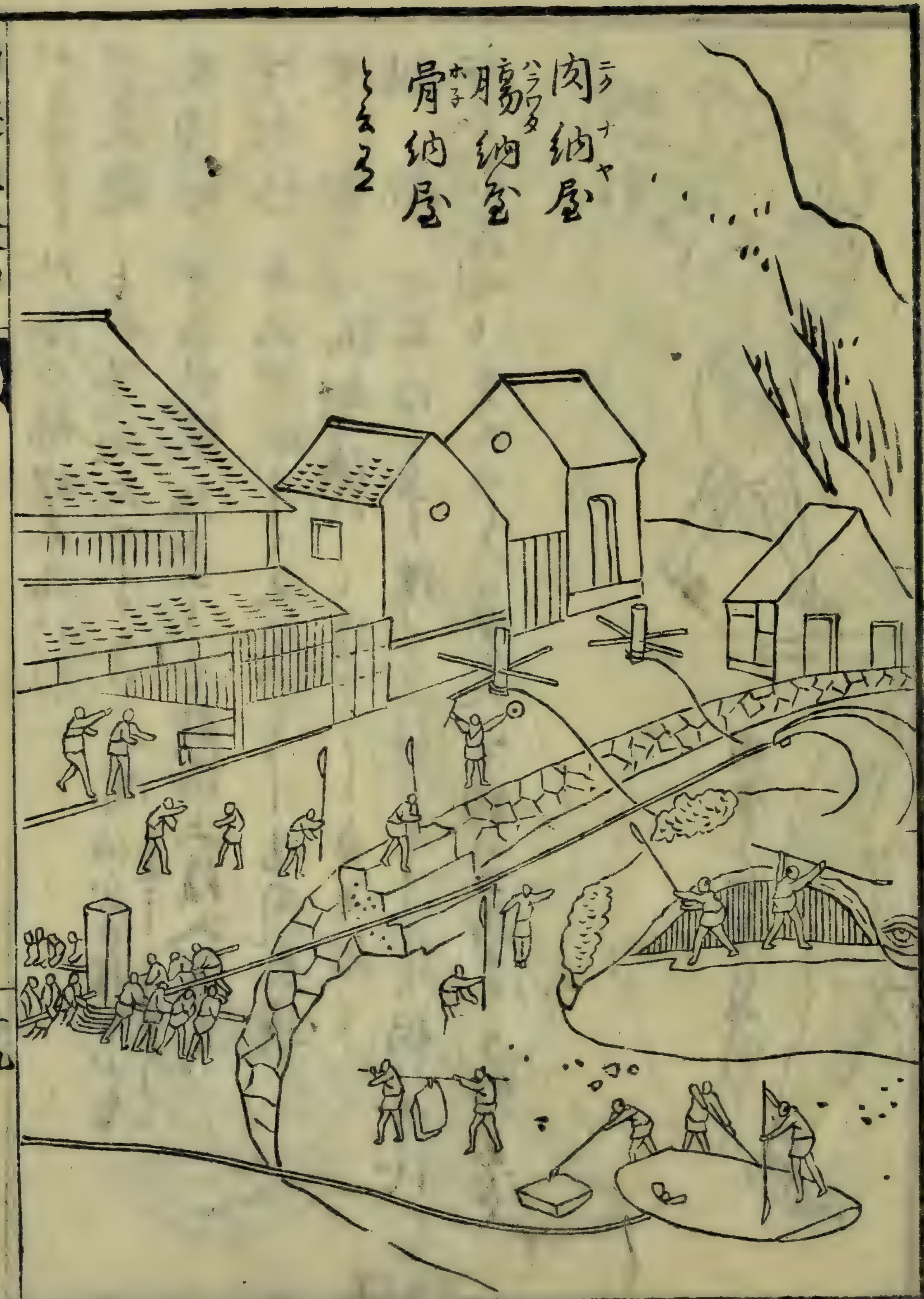
小海老(アミ)といへるもの奥よりゆ

又鯨(ケイ)鯢(ゲイ)とも(ヲクジラ メクジラ)

万力車 捲く(シャチ) 七ヶ所ニ在

大綱をもて捲きる




肉納屋（ニクナヤ）
腸納屋（ハラワタ）
骨納屋（ホ子）

此島にて所漁の鯨凡五品あり

世美鯨　上品味美大なるものハ十間油弐百樽を出せり

長須鯨　中品味淡物柔かにして頭を海上に出し後入て底に走る

座頭鯨　中品少剛にして又味ひなし　味同じ長須に

児鯨　下品剛極にして頭かたし舟を破る

鰯鯨　下品味甚稀なり　鯨の名にして此鰯を食ふ

右各象異也予見る所のものハ世美　座頭の二品なり其余ハ不見




剪切て人夫二手皮を持
ベツタウト云者人夫をとがむる図

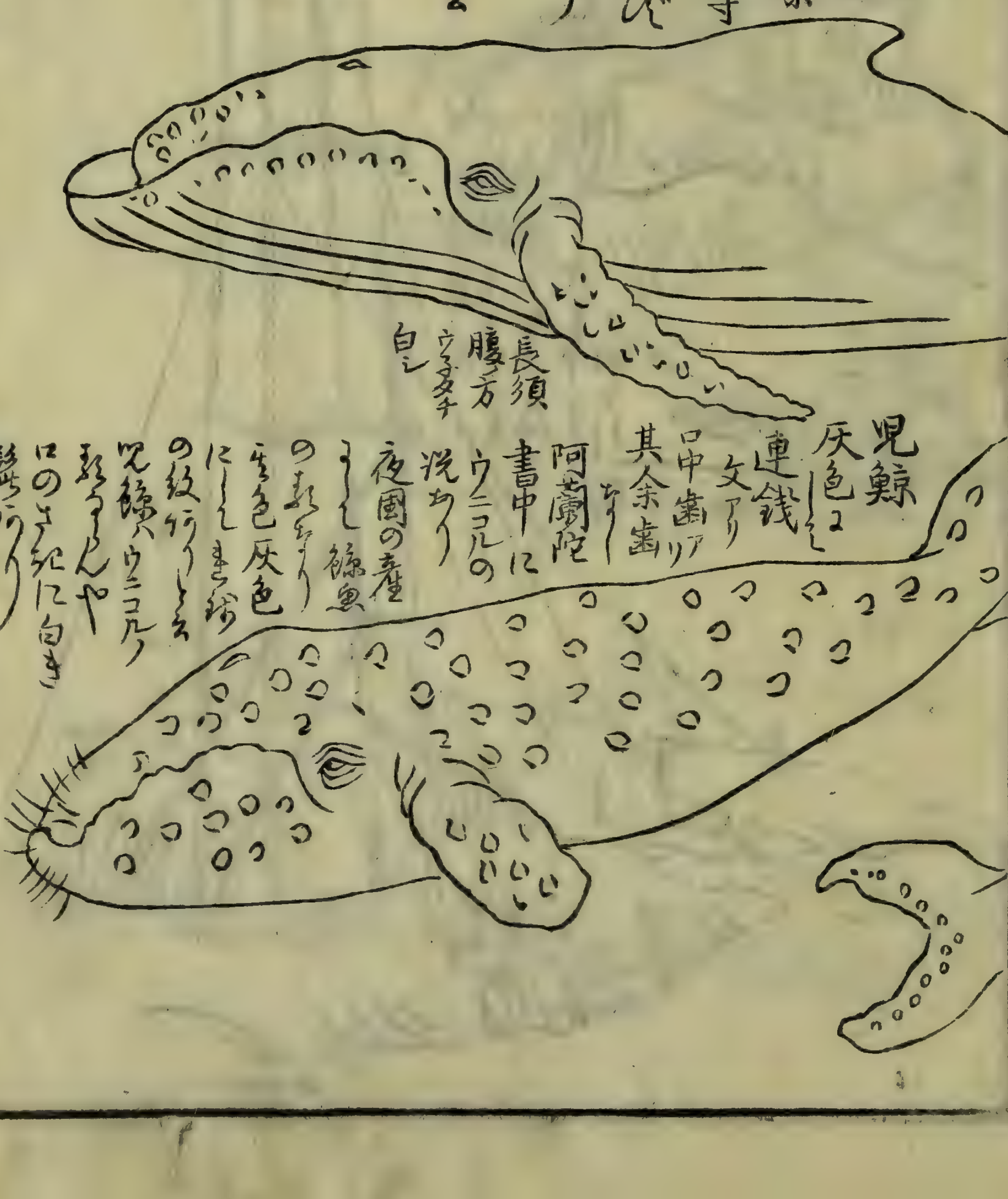

座頭鯨
腹の方
ウ子リ多
此ヘン
コブ〳〵
アリ
鰯鯨
世美

長須鯨

長須(ナカス) 生頭(ザタウ) 腹子(ハラコ)

大サ九尺余

一名世美児鯨 腹子八寸より一尺五六寸 總て鯨ハ卵生(ランセウ)(タマゴ)にあらず はらみて生す むね一疋なり 交(さかる)も又人のごとしと云



兒鯨 灰色にして 連銭文アリ 口中歯アリ 其余歯なし

阿蘭陀書中にウニコルの説あり 夜國の産なりし鯨魚の類なり 生色灰色にして黒き斑の紋有りと云 兒鯨ハウニコルノ類ならんや 口のさきに白き髭あり


鮪見樓（シビミロウ）
鯨見
魚来る時
楼の上より見まもる者
幟を出す 立楼の
舟ニ其印を見て
口網を引開

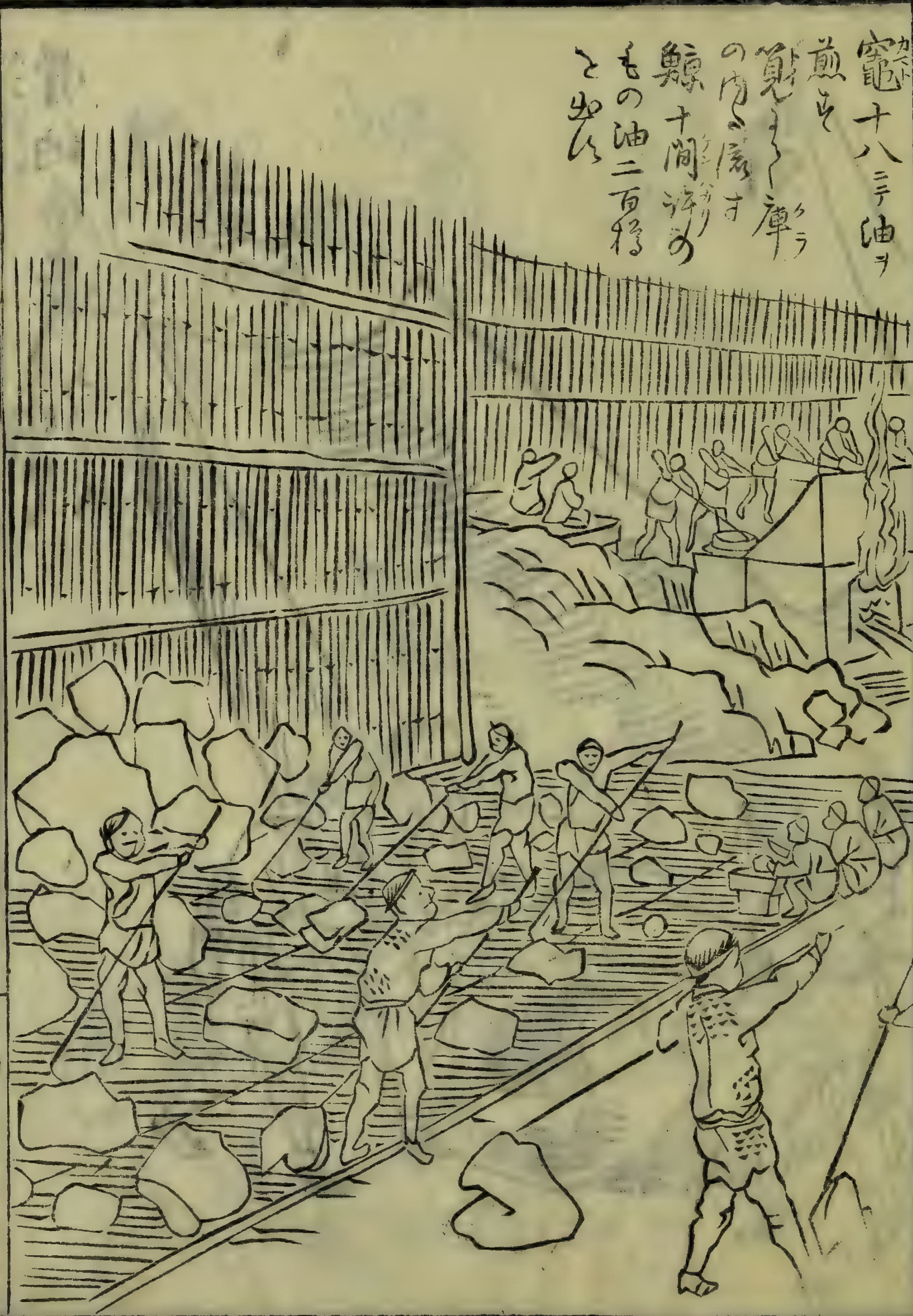

鮪網
浮キ木
竹二本を
ゆふへし


是ハ貝より生じたる
ものゝはし肉也
いきものはして
うごく
此貝生蛭
蟒乃腹の方
につく此貝
あまた
図のごとし
生胭脂肉色
貝の色
白し
生蛭
蟒の鱗ヒレ
肉あるし
骨なし
切口
白
切口脂油肉
口


此淅貝ハ世ミ美鯨の跂又尾鰭につく
此虫世美鯨にあり
瀬貝の間ニ有り虱ト云
生跂鯨乃鰭
又尾のまはりに付
岩のセイと云
ものゝ
貝なり
海岸の
石に生ス
漁父
貝の色白足のごとき
と出る肉色にして
うす赤色なり

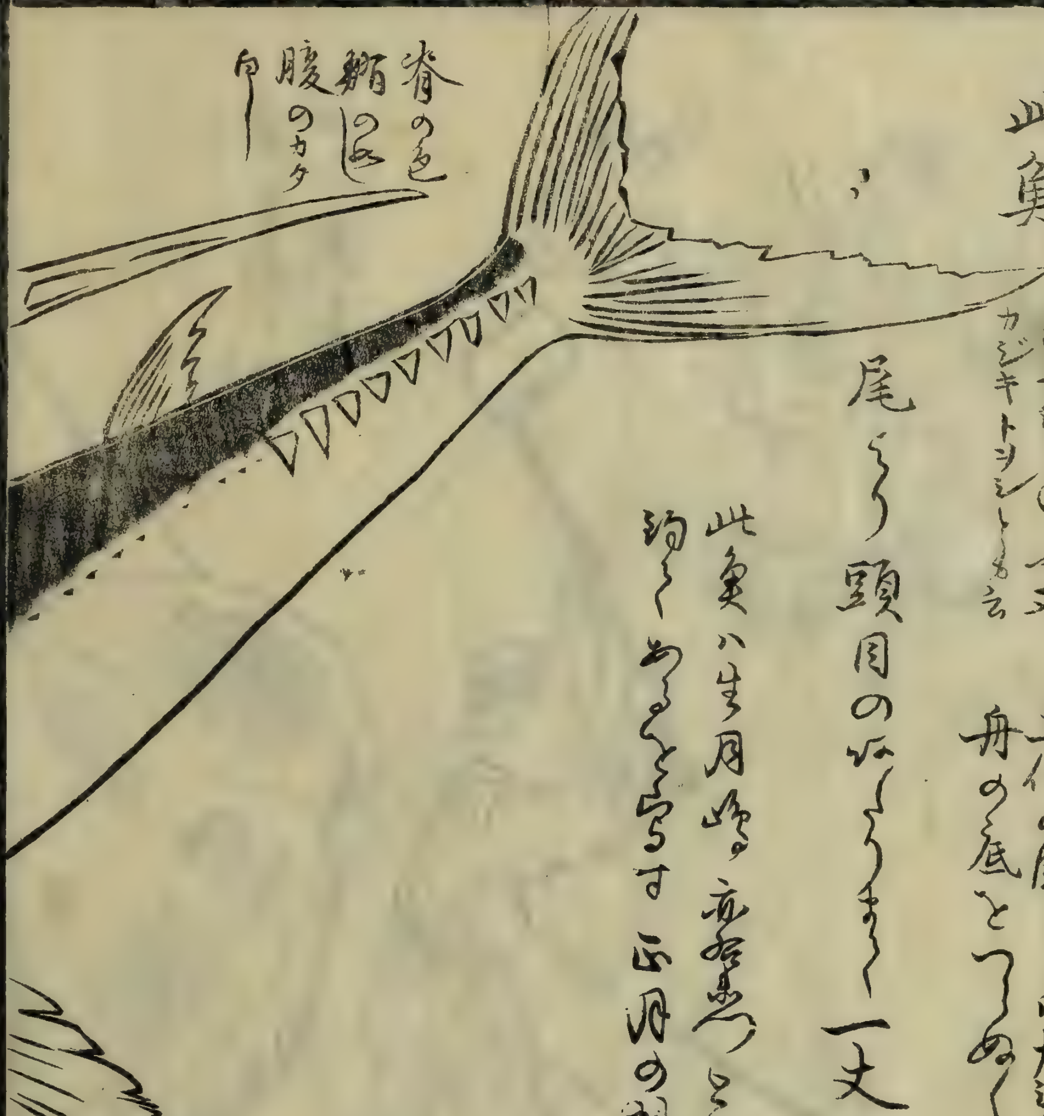

肉納屋之圖
役人

竈十八ニテ油ヲ煎る蒐まし庫の内に儲す鯨十間許のもの油二百樽と出る




骨納屋之図 又膓納屋あり
上腮の大骨
肋骨


骨を小く碎クダキ
油を煎ぞ



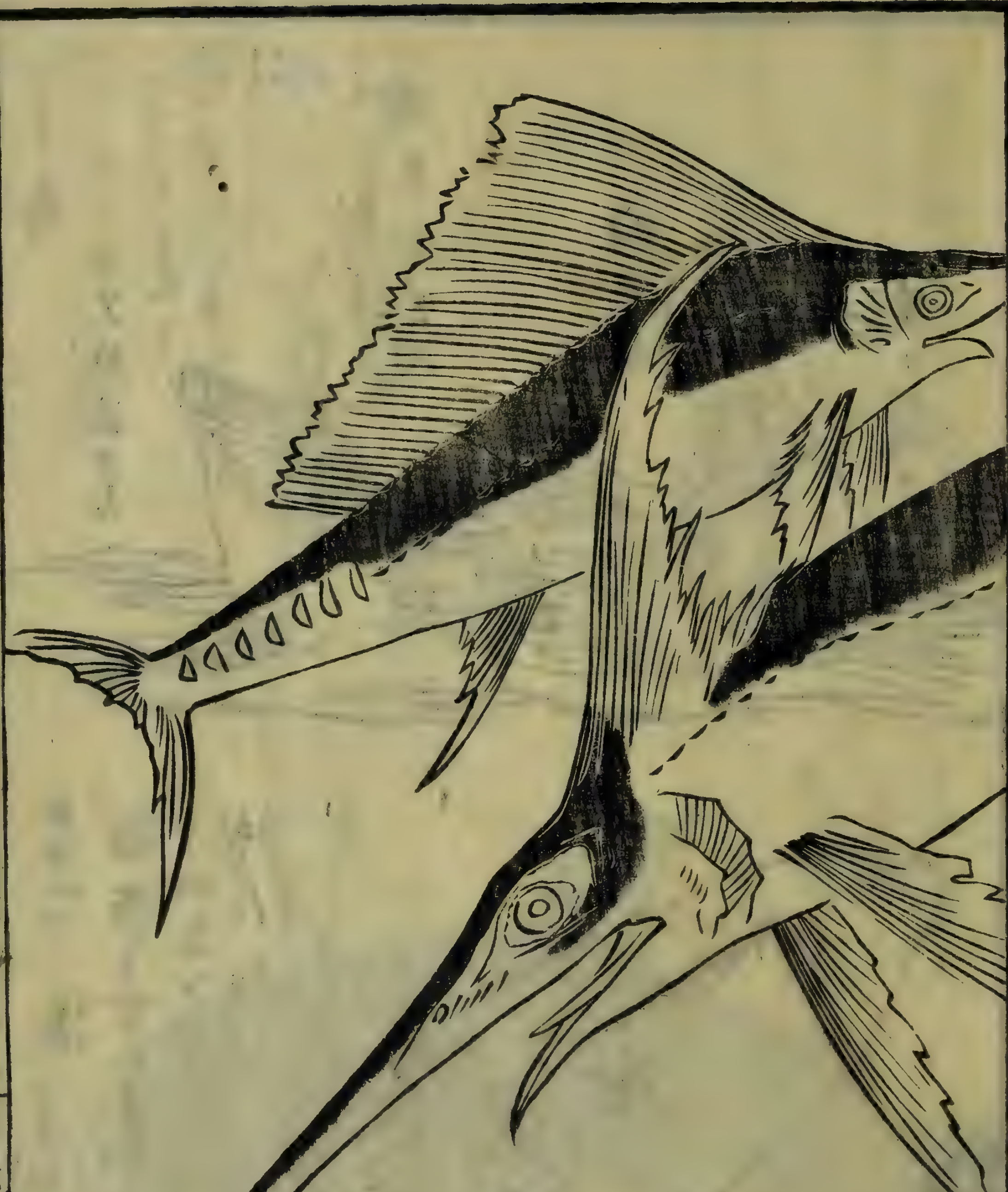
此魚アミナシといふ又カジキトヲシとも云

尾より頭迄のながさ一丈余也

土佐の国にてハカジキ通しとて舟の底をつらぬく

此魚ハ生月嶋の方言にてよばる者の集る所なり

得たるを写す 正月の料理に用ゆるよし



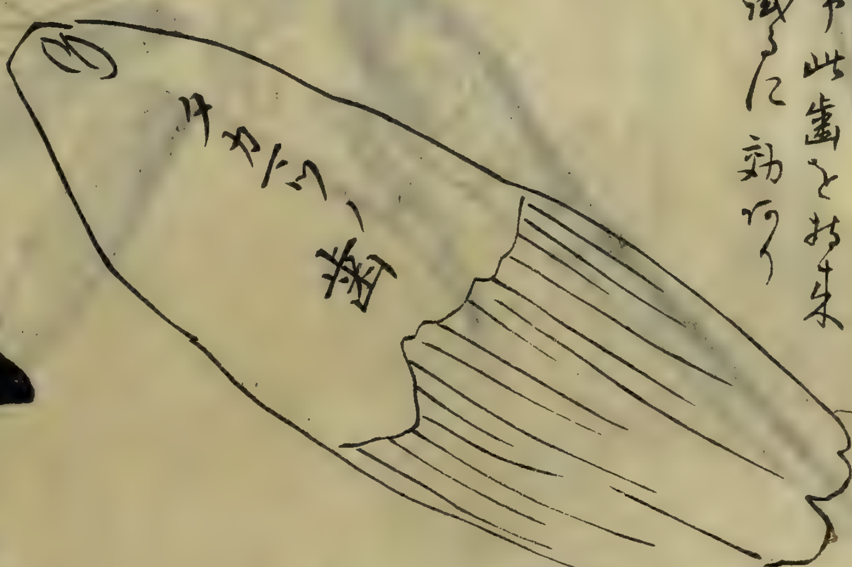
ライ鳥

此鳥ハ常ニあそん鯨漁(クジラリヤウ)の舟につきしたがひて鯨の肉を喰ふ事かつてはなれず鷗(カモメ)ニ似て大サ白鷺(ハクテウ)のごとし鼻(ヨカ)に竅ありて八歩(アリク)事あたはず



タカミツノ歯 一名鯱(シャチホコ)

鯨鯢を喰ふ魚也
其此歯をもつて
賊に効あり



此圖ハ此島山の漁父に尋ねて圖れ
海中に潮を吹勢を出れまれ時ハ
見ることなくも全體を見え
世美鯨と同く潮を二筋よ吹く
くじらも世美の如く一筋よ吹く之

タカマツ
一名シヤチホコ
大サ二間余



此圖ある所乃鯨鯢(ゲイダン)ハ余(ヨ)過一見る所のことを記し見るものハ多くして
かくのごとく毫毛(ガウモウ)も嘘言(キヨゴン)なし文章(モンク)を華美(ハナヤカ)にせんものゝ為に
あらはすものにあらず五島平戸生月紀州熊野浦 此浦ニて捕る所の鯨ハ小なり 其外にも所数十六所あり
漁父(キヨフ)の外(ホカ)捕ひ近里のものは鯨の全體(ゼンタイ)を見ざる者多しいかゞ
あるかなれども五島ハ城下を去ること事八九里の所にして平戸
も同五六里又ハ十二三里を隔(ヘダツ)る島々ニて鯨漁ハ毎年極月
より正月初旬迄漁(リヤウ)を為す也其ゆへに少なし櫓を押(オス)者
八人刺子(ハザシ)一人他の者ハ皆いづれも鯨船舟に付る
多し舟覆(クツガヘ)る水練(スイレン)を知ざるものハ命をうしなふ漁父(リヤウシ)は

幼少より海邊に育ち終に水練を事とするもの有けるが波濤のうちにて巨魚にしたがふもの多しとて放する者録し虚談とよくものゝ盛え三年を経て皆なゝく勢を尽す油を掇出んことを以て余嘗平戸島に渡り松浦侯の命によりて生月島益富又右衛門か宅に居る事二十日 又右衛門ハ鯨事を所々の島に人を出し鯨をとる事を業二千餘人を扶持す 鯨事あまた見る事を好事ならずして是に危とおびたゞし 此條をも見て

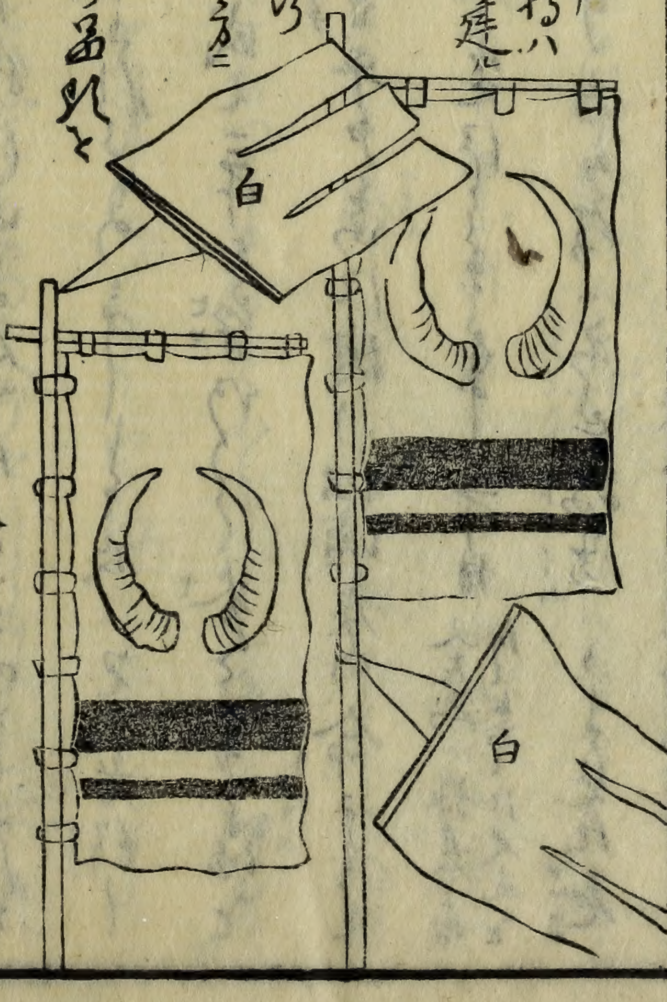
此島より壱岐へ十里西南より鯨剥古井市島といふ所の島

元日此島にも門松として雑煮といふ事なし 正月四日此島を出船し平戸島の方白嶽の事を乗 繪鯨數

丈に峙て赤壁をなし鏡と鏡をあれば油水とつらにいへる
岩壁赤シ大諸石のならり　亜の色は明て砂なり　生海岸を見なりて田助港に到ル長崎より
乗舟此　田助に於て　夫より舟を出して平戸城下に着

鯨舟旗乃圖　長須子持ハトモの方ニ建ル

勢美のときハ帆柱を舟の表ニ建ル坐頭ハトモの方ニ建てる
皆旗の建やうにて鯨の品を知るなり



巻之四終